

同志社礼拝堂の保存修理工事概要

中 尾 正 治

同志社礼拝堂は昭和三十八年七月一日に重要文化財に指定された（文化財保護委員会告示第三十六号）。その指定説明の中に「明治欧風謳歌のもっとも盛んな時代における数少ない煉瓦造建築遺構でアメリカ人の設計及び日本人の施工になる純洋風建築であるという点で文化史的価値が高い」と記されている。

同志社の最初の礼拝堂は明治十四年に小規模な木造で建てられていたが、同十八年に煉瓦造で建て替えられたのが現存礼拝堂である。明治十六年に建設着手された同志社で初めの煉瓦造建築の彰栄館竣工後間もなく書籍館（現有終館）と伴に同時に着工された。これらの三棟は設計指導に宣教師D・C・グリーンが明治十五年～二十年の間、同志社在職中に担当したことが新島襄の記事にみられ、彼の宣教師としての立場を越えて洋風建築家として新島襄の招来を受けたものと想われる。グリーンは同志社以前には神戸に住み、外国人居留地のユニオン教会礼拝堂の建設に携わったようで、同志社の礼拝堂と外観が類似していることからグリーンが両建物を設計したとする推測はあながち否定することはできないと考える。

同志社の礼拝堂をはじめ他二棟建設の施工を担当したのは日本人大工であったとすることは事実で、礼拝堂及び書籍館は京大

工棟梁家の三上吉兵衛が請負っている。棟札等の資料から施工者の名を知ることができる。彰栄館の施工大工は当時上京在住の尾滝菊太郎が請負ったらしく、大工小島佐兵衛が実際の施工を行なった。のち小島はハリス理化学館建設のスタッフとして加わっている。

礼拝堂に先立って建設された彰栄館は主体を煉瓦造で築き上げているものの内部の間仕切り壁は土蔵式の土壁であり、和小屋とし、屋根は棧瓦葺にするなどまだまだ純然たる洋風建築技術だけで建設することができなかった。これは和洋混滑の建物と云わざるを得ず、日本の技法から脱することができなかった。それに対して礼拝堂では鉄トラス、樑梁等を用い、その小屋組をそのまま現わし、屋根野地板を斜めに張り合わせて構造上有効な斜材の役目を負わせ、屋根をプレス成形の鉄板葺とするなど、既製の伝統的な建築技術からみて思い付きようもない新技法が採用されている。それは教会堂として一室広間の大空間が求められていたと推察され、側廊を省略した身廊だけの簡素な空間にまとめることになったと考えられ、薔薇窓、二連窓のステンドグラスが雰囲気を高めている。三上家所蔵の請負履歴書によると礼拝堂の建設以前に京都田中村の燃糸場を木造で「西和折中」で建て、麻布紡績会社の六〇〇坪の建物を煉瓦造で建

ている。このことから三上氏は当時の新技術を導入した建築にいち早くから手掛け、経験を蓄積していたのであろう。礼拝堂の建設に際しても手慣れたところを駆使したものと推察される。

礼拝堂は煉瓦造一階建、切妻造、妻入で正面に玄関、背面に半八角形のアプスが付き、要所にバットレス（控壁）が取り付く。造立から現在に至るまで使用上の都合により所々に修理改変の状況がみられる。創建頃の古写真を見ると旧は大屋根棟北端及び玄関屋根棟の全長に互って楕形の棟飾りが、大屋根棟北端に十字架状の棟端飾りが立ち、東西の煙突頂部に矢形の風見が取り付けられていた。しかし錆化が進み雨漏りの原因ともなったので昭和初め頃に撤去された。また屋根葺材のプレス鉄板は昭和四十四年に葺替えられたもので当初に使用されていた鉄板はその一部が保存されていて、一八八二年四月四日の押型銘が入り、明治十五年に製作されていたことが分かった。

内部の床は元来、杉板張りであったがフロアリングボードに張り替えられ、座席も床に直接固定された鋳脚の合板椅子に変更されている。座席は元は円弧状をした木製椅子であり、また南及び東西の三方壁面に添って腰掛け座席が造り付けられていたことも古写真、痕跡から分かる。

竣工間のない明治二十二年に中二階の落下事故が発生し一部破損したようであったが、主に基礎、柱、梁の改修のため手が加えられている。その後、明治末年頃に昇降階段の幅が安全のため約三十七センチメートル拡幅されている。戦後中学校生徒数が一挙に増員されたことに伴い、昭和二十六年に新彰栄館が建設され、礼拝堂の使用



明治末年頃に撮影されたと想われる礼拝堂

大屋根棟には楕形状の棟飾りがあり、その北端には十字架状の棟端飾りが取り付けられていた。
また煙突頂部には矢形の風見が設けられていた。

に際しても座席の増設が計画され、中二階の床拡張となり、階段も中央一箇所から左右二箇所に改められ、正面出入口の内開き戸が外開きに付け替えられた。

建物内の照明は当初には身廊の中央附近に吊り下げられた古式で色彩豊かなシャンデリア風金属製のシェードを付けたオイルランプが使用されていたが明治三十九年頃になると白熱電灯が使われるようになり、次いで昭和三十三年頃から現在の蛍光灯照明が利用されるようになった。

地下室には煙突最下部に開けられた排煙孔及び煤出し口を兼ねた通風孔と身廊床の中央附近二箇所に設けられた暖気取り入れ口、そしてストーブ設置跡、石炭屑がみられることから、ここは初め床下暖房に使用する部屋であったことが判明した。

以上のように保存修理に伴う調査によって建築当初の姿とその変遷が概ね明らかとなったので記述することにした。

礼拝堂関係略年表

明治十四年（一八八一） 十二月、最初の礼拝堂が木造平屋建てで建てられた。当時の正面（弘風館の北東あたり）近くに位置した。

明治十五年（一八八二） 四月四日、現礼拝堂の当初に使用されていた屋根葺き鉄板が製作される。春（二十年末までD・C・グリーン、同志社に在職

明治十六年（一八八三） 十二月二十一日、彰栄館定礎

明治十七年（一八八四） 九月十五日、彰栄館竣工（献堂式）

明治十八年（一八八五） 二月十日、礼拝堂・書籍館工事着手。

十二月十八日、上記二棟定礎

明治十九年（一八八六） 六月二十五日、礼拝堂献堂（捧堂式）。

十一月二十五日、礼拝堂及び書籍館竣工

明治二十年（一八八七） 十一月十五日、書籍館開館

明治二十二年（一八八九） 四月二十二日、礼拝堂で講演会中に中

二階の落下事故が発生、その後、堅固に改修。十一月十五日、波理須理化学館定礎

明治二十三年（一八九〇） 三月二十六日、波理須理化学館上棟。

七月、理化学館竣工

明治二十五年（一八九二） 十一月四日、クラーク神学館定礎

明治二十六年（一八九三） 四月八日、神学館上棟

明治二十七年（一八九四） 一月三十日、神学館開館式

明治三十七年（一九〇四） 九月、礼拝堂内部にストーブを据え付ける。

明治三十九年（一九〇六） 二月十六日、礼拝堂内部の従来のオイルランプを改め、この日より電灯を使用する。

昭和六年（一九三一） 演壇上部の尖頭アーチ下端の補強はこの頃か？

昭和二十六年（一九五一） この頃、中二階の床を拡張し、階段状床組を構成。

昭和三十三年（一九五八） この頃に礼拝堂照明が現在使用の蛍光灯照明に替えられた

昭和三十八年（一九六三） 七月、重要文化財に指定される。八月、床及び床組の修理となり合板座席が置かれ、中二階床の補強

昭和四十三年（一九六八） 十月～翌年一月、礼拝堂屋根葺き替え
昭和六十一年 一月から十二月まで礼拝堂の構造補強を主とした保
存調査工事を実施

昭和六十二年 五月から昭和六十五年末までの予定で保存修理工事
を実施中

煉瓦造建物における構造補強のコンセプトは、建物の「耐震安全性」を確保向上させることにあると考えられている。そのために現在、同志社などに建てられ、残存している煉瓦造建物が既往の大地震でどのような被害を被り、またどのような壊れかたをするのかを知る必要がある。昭和四十一年にトルコ共和国東部の高原地に発生したバルト地震によると、地上二階建程度の煉瓦造低層建物の震災崩壊例に、煉瓦壁体と床組との構造的結合がやや不完全であったため、震動中の壁体の変形、移動により屋根小屋組や上層階の床組構造の支端が煉瓦壁から脱落し、小屋組や床全体が下層へ落下するという悲惨なものであり、他に窓・出入口等の開口部の上縁である楣、アーチ部分の破損に伴う煉瓦壁体の部分的崩壊であった。

彰栄館や礼拝堂が無補強のまま不幸にも崩壊するパターンがみられるとき、前記のトルコの状況が充分に考えられることから、安全の確保という点を配慮し、並びに文化財建造物としての可及的な保存を計るため、その対策として構造補強を施すことが緊急な課題となっていた。

同志社は明治時代に建築した五棟の煉瓦造建物のうち、最初の根本的な構造補強が施されたのは有終館で、昭和三年の失火で内部を焼失したのが原因であり、のち同五年に修理方法として建物壁体内

側に添って鉄筋コンクリート造が構築されている。昭和五十一年にハリス理化学館にも主に壁体内側に鉄筋コンクリートが打たれ補強が施された。これら二棟は重要文化財に指定される以前に構造補強のため内部の状況が大きく改変されていたことから室内を除く外観だけの指定となっている。

従来の煉瓦造建物の耐震補強法としては、鉄筋コンクリート造と鉄骨造とが考えられていた。いずれも鉄材は錆化するが、とくにコンクリートは表面の酸化などによって約五十年で劣化の傾向を示してくる。鉄筋コンクリートの場合、内部にコアを築く関係上、耐震壁を計画し易いが、この補強法によって十分な壁量を得ようとするとな壁面的大幅な改変が必要で、内部空間の雰囲気と機能が損なわれる結果となっている。その例としてハリス理化学館等が挙げられる。

一方鉄骨造の場合は鉄筋コンクリート補強法に比して内部空間の保存度は大きく、また将来劣化部材の取り替えが容易で有利な利点もある。このような考え方から礼拝堂より先んじて構造補強修理が施された彰栄館は煉瓦壁体を鉄骨で支承する方法が採用された。同志社では三度目に補強修理を行った建物となったが、煉瓦造建物全体に鉄骨補強を用いたことは我国において先駆的な存在になっている。

なお、クラーク記念館も建物の南東隅付近に鉄筋コンクリート造のバットレス（控壁）状の補強控柱が付設されている。

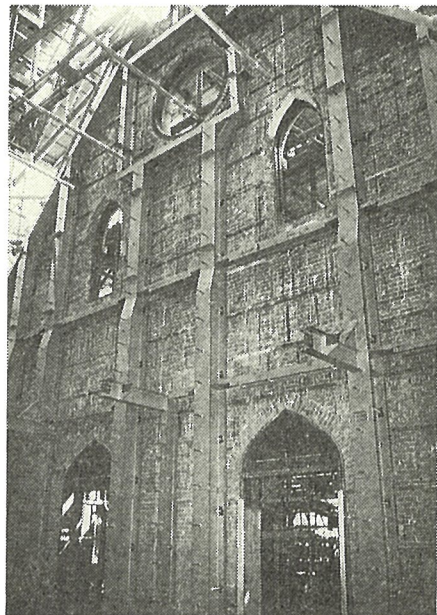
礼拝堂の構造補強については当建物が建設後約百年を経過した純煉瓦造建造物であり、今後とも可及的に保存活用をしてゆこうとする

ならば、煉瓦壁体自体そのものは著しい損傷は少ないものの後述するような構造上及び耐震上に問題があることが判明したため、耐震構造補強を行なうことになった。

建物の南北面の妻壁は高さ約十六メートルに及び、その下層部には玄関やアプスの突出部が付設されているが、上層部は壁厚は薄く完全な独立煉瓦壁であり、激震時の転倒モーメントに対する抵抗は殆ど期待できない。また東西バットレス柱列付の壁は二連窓によって開口比が大きいことにより激震時に軒蛇腹が破壊され、屋根のトラス架構の倒壊を招く可能性がある。

以上の状況から判断して耐震性を向上させるという考えに基づいて構造補強を計画した。南北妻壁内側に添って鉄骨を控壁構造に組み、東西バットレス柱列壁体内には鉄筋コンクリート柱と鉄骨耐震壁を埋設し、これらによって壁体の倒壊を極力防止し安定した保存を計るが、建物の外観を尊重し、内部の空間構成の雰囲気損なわないように補強法に配慮がなされた。

今回の修理工事では、礼拝堂は修理後も従来通り講堂を兼ねるものとして利用される予定であることから内部の復元は将来に託することにし、構造補強のほかは棟飾り等の復旧にとどめた。また小屋組トラスの端末部とそれを支承する敷桁が雨水侵入等による原因で大きく腐朽していたため、敷桁は総て取り替え、防水と排水効率を高める工夫を施す。凍結による損傷の著しい煉瓦は取り替え、目地材は砂漆喰で付着力が劣化しているので樹脂含浸等による強度回復をはかる。復元する棟飾り、風見は古写真から他部材寸法との比率を算出して概形を捉えることができた。



南妻煉瓦内側に添って構築された補強鉄骨

最後に、今回の保存修理工事に先立って実施された調査工事は総事業費二千万円(国庫補助金五〇%)、工期十二ヵ月で完了した。引続いて保存工事は総事業費予算で三億五千万円(国庫補助金五〇%)、工期は四十四ヵ月の予定で実施中であり、長期間を要する工事となった。修理に伴う復元作業は建物当初の状況を出来る限り克明に把握できる資料を整理し、現状の変更という文化財保護法に則した方法で資料を作成し文化庁から許可を得たので変更の可能性箇所(棟飾り等)は復元を行う予定にしている。

(京都府教育庁指導部文化財保護課建造物係技師)

京都市指定文化財

「新島襄旧邸」

—その建築と家具について—

新谷 昭 夫

京都は文化財の宝庫といわれる。じつは、文化財保護法によって国の指定を受けている重要文化財の約十五パーセント（国宝では約二十パーセント）が、京都市内に集中しており、さらにこれら国指定文化財のほかにも、京都にとってかけがえのない文化財が数多く残されているのである。ところが、近年の急激な都市変貌や多様化する生活様式のなかで、未指定の文化財はその保存が困難な状況になつてきており、そこで京都市では昭和五十七年四月一日、京都市文化財保護条例を施行し、条例に基づき文化財指定を進めている。

さて、同志社の関連では礼拝堂、彰栄館等五棟がすでに重要文化財に指定されている

が、明治時代の初めに建てられた新島襄旧邸も洋風住宅の早い例として貴重な文化財であり、京都市では昭和六十年六月一日、市指定文化財として指定するとともに、翌年六月二日には旧邸のなかに残されていた家具五十八点についても附として指定した。

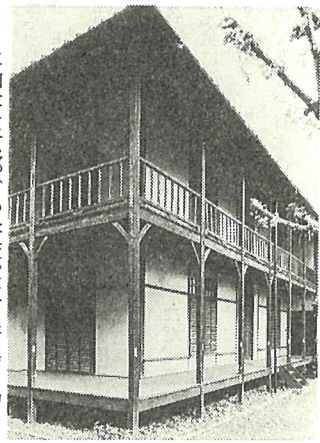
ここでは、新島襄旧邸の建築と家具について、簡単な紹介をおこないたい。

新島襄旧邸の建設まで

新島襄は、十年間にわたるアメリカのアーモスト・カレッジ、アンドローヴァー神学校への留学ののち、明治七年（一八七四）、日本にキリスト教大学を開設することを目的に帰

国した。当初彼は候補地として大阪を考えていたが、大阪府知事渡辺昇からアメリカ宣教師の雇入を拒否され、そこで新島がつぎに候補にあげたのが京都であった。明治八年四月、京都府参事横村正直、同顧問山本寛馬に会い協力を求めたところ、二人はともに好意的で、





とくに山本は京都での学校設立を新島に勧め
ている。こうして五月末、京都での学校設立
が決定された。

学校の敷地は山本寛馬の所有地であった旧
薩摩藩邸を譲り受け、すぐに「私塾開業願」
を文部省に提出し、同八年九月には学校開設
が承認された。校舎が新築されるまでは、寺
町通丸太町上の松蔭町十八番地の華族高松保
実邸の半分を借り受けて仮校舎とし、十一月
二十九日、ここに「官許同志社英学校」が開
校した。

新島はこの間、当初は山本家に寄宿し、開
校とともに新島丸頭町に移っているが、これ
は借家であったため、翌九年に彼は高松邸を
濱岡光恒名義で買とり、十一年五月一日、

自邸の建設に着手した。現在の旧邸はこのと
きのものである。また、その『屋宇建築届』
には、「私義 此度御区内松蔭町十八番地所
を地主丸太丁上ル東側住京都府士族濱岡光恒
より借用仕屋宇二ヶ所本日より建築に可取懸
候間此段御届申上候」とあり、旧邸とは別に
もう一棟建てられたことがわかる。これは、
現在旧邸の西北に建つ木造の平家のことで、
両親の隠居所にあてられていた。工事は九月
初めにはほぼ完成しており、同月七日新島は
新島丸頭町より移り、さらに九日には両親・
姉等も転居している。

設計者・施工者は明確でないが、宣教医W・
テイラー (Wallace Taylor) の助言のもと
に新島自身が設計したと伝える。ただ、テイ
ラーは明治九年三月から五月下旬まで同志社
英学校の教師として勤め、その後神戸に移っ
ていることから、住宅の設計に関わりをもっ
ていた可能性は考えられるものの、期間的に
みてどの程度彼の考えが反映されているかは
疑問である。

旧邸の建築

旧邸は木造二階建の居室部分と、さらにそ

の北側に付属する差しかけ屋根の平家部分と
からなる。居室部分は各階三方にベランダを
まわして等間隔に柱を建て、開口部にはすべ
て引き戸または開き戸の鏝戸を装置して、外
観的にはコロニアル・スタイルを基本とする
が、ベランダ柱列を角柱とし、外壁を下見板
張でなく漆喰仕上りとするなど、簡略化が行
なわれている。また、細部装飾がほとんどな
く、真壁の白い壁面に配された茶褐色の木部
が単純明快な美しさを見せている。

居室部分内部は、一階に客間・食堂・居間
・書斎が、また二階には寝室等四室が配され
ている。客間は板敷きで、南東隅に暖炉を備
える。食堂は北寄り半間通を板敷きとするほ
かは畳が敷かれ、ほぼ中央に掘りごたつが設
けられているが、これは後補である。居間は
大半を四畳半の茶室が占めるが、これももの
ちに付け加えられたものであり、もとは板敷
きであった。書斎は板敷き、壁には作りつけ
の本棚を備え、机をはじめとする家具類も残さ
れていて当時の雰囲気をよく伝えている。食
堂・書斎の間は短い廊下となり、箱階段が置
かれている。二階は板敷き、畳敷きの居室各
二室が、矩折りにのびる中廊下の両側に配さ

れており、それぞれの居室には一間から一間半の押入が付く。建具は開き戸と襖が混用されている。

平家部分は西面に簡略な式台構の玄関を開き、奥は半間幅の廊下に沿って階段、台所、風呂、便所などが並ぶ。

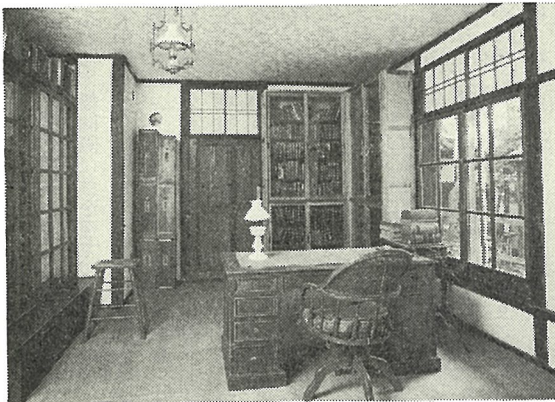
先に述べたように、この建物は新島自身が設計に携っていたといわれ、だとするとアメリカ留学の長かった彼がアメリカの生活スタイルを自邸に取り入れたとしても不思議でない。では、このアメリカの生活スタイルは、自邸においてどのような建築的表現として示されているのであろうか。まず第一に椅子式生活の導入、つぎに各室の独立性が高い平面計画の採用、という二点に示されていると考えられる。

わが国は伝統的に畳の上に直に座る座式生活であったが、新島は自邸において椅子式生活の導入をはかり、そのために一部を除いて各室を板敷きとしたのである。ただ、それは完全に洋風化されたものではなく、あくまでも上足で、畳を敷く代わりに板敷きとしたものであり、日本の風土にあわせたものであったといえよう。



1階客間 装飾が少なく簡素な仕上げとなっている。中央と壁際の卓子・椅子は当時のものである。

つぎに平面計画においても、それまでの伝統的な住居では他の部屋を通してしか奥の部屋に行けなかったが、廊下を部屋と部屋の間に通すことにより各室の独立性を確保している。つまり、平家部分では、玄関から奥にのびる廊下に沿って台所をはじめとする各室が配されている。また居室部分一階では、他の部屋を通らずに書斎・居間に行くためには東

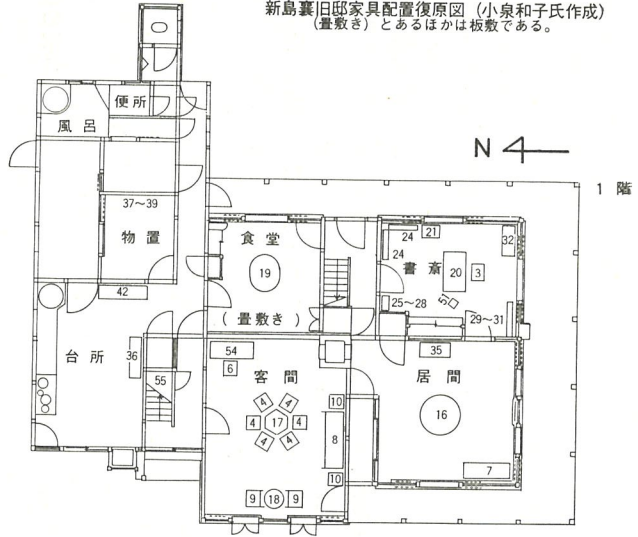


1階書斎 家財もほとんどそのままに残されており、当時の雰囲気をよく伝えている。

側のベランダを通らざるをえず、動線計画に多少難が見られるが、二階は矩折りの中廊下を採用することにより合理的に処理されており、全体としてみれば各室の独立性がかなり保たれているのである。

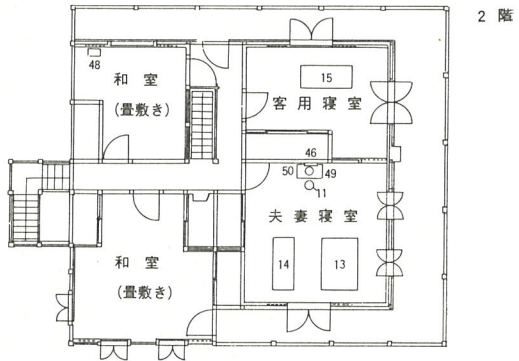
このほか暖炉・洋式便所等の近代設備の導入、長押の廃止などにも進んだ点が見られる。日本における住宅の本格的な洋風化は明治

新島襄旧邸家具配置復原図（小泉和子氏作成）
（畳敷き）とあるほかは板敷である。



家具配置の復原表			
	室名	品 名	配置 図番号
一 階	客 間	六角卓子	17
		小椅子	4
		小椅子	5
		オルガン	54
		スツール	6
		籐長椅子	8
		籐肘掛椅子	9
		籐小椅子	10
		籐丸卓子	18
	書 斎	書机	20
		回転椅子	3
		書棚	24
		脇机	21
		ガラス戸棚	32
		本棚	25
		本棚	26
		本棚	27
		本棚	28
		書類棚	29
二 階	居 間	丸卓子	16
		寝椅子	7
		帳簾筒	35
		壁掛鏡	47※
		卓（しょく）	22※
		屏風	1※
		書類整理箆筒	34※
	食 堂	拡張卓子	19
		配膳台	43※
		小椅子	12※
		角卓子	23※
	台 所	台所戸棚	42
		戸棚	36
		脚打折敷	44
	夫妻寝室	ベッド	13
		ベッド	14
		洗面台	49
		洗面器	50
		壁掛鏡	46
		書棚	33
		フロアスタンド	41
	客用寝室	折り畳みベッド	15
	和 室	鏡台	48

※は後に置かれたものを示す。



後期の住宅改良運動に始まるが、ここでは明治初年という早い時期にこうした洋風化が行なわれていたことは注目される。ただ、この洋風化は単に純粋な洋風建築を日本に持ち込むのではなく、たとえば箱階段や襖の使用などにみられるように、いわば「日本的」洋風化であったといえよう。

旧邸の家具

建築のなかの家具はこれまで顧みられることが少なかったが、住宅とくに洋風住宅においては、家具を備えてはじめてその住宅の使用が可能となる。家具のないがらんとした部屋では、それがどういう部屋なのかさえわからない。家具がおかれてはじめてその住宅本来の機能を發揮するわけで、家具は建築と密接不可分のものである。ところが、建築の文化財指定においては作りつけのものを除き、家具は指定範囲に含まれることはなかった。建築が保存されてもなかの家具が保存されなければ、その価値は半減するであらう。ここに家具の保存の意義がある。そこで京都市では、新島襄旧邸のなかに残されている家具についても建築と一体のものととらえ、附とし

て指定をおこなった。

旧邸には、明治二十二年に新島が没したのちも八重夫人が昭和七年（一九三二）に永眠するまで住んでおり、家具はこの住宅として使われていたときのもので、五十八点を数える。大部分が新島襄の生前に備えられ、一部新島の没後に夫人が使っていたものが含まれると考えられる。旧邸が洋風を基本としながら日本の伝統的手法も用いられていることから、洋家具だけでなく、約半数を和風家具が占めている。洋家具のうち外国製のものは九点で主としてアメリカ製で、これは新島がアメリカから持ち帰ったものか、あるいは友人などから贈られたものであらう。

これらの家具は、新島および夫人の日常生活や考え方を反映し、その簡素な屋内意匠によく調和している。また、残存するものが少ない明治初期から中期のものが多く、とくに国産の洋家具については明治初期における家具技術を示す資料としても貴重である。

新島襄は、今日の「学問都市」京都の基礎を築いた一人であり、その旧邸は近代京都を示すいわば「証人」といえる。この意味で、

旧邸は京都にとってかけがえのない貴重な歴史的遺産であり、これをこれまで守られてきた同志社の苦労はなみなみならぬものであったらう。また、近く修理も予定されている。今後とも、大切に保存されることを願うものである。

（京都市文化観光局 文化部文化財保護課勤務）

表紙の言葉

同志社の今出川校地には美しい、風格を感じさせる建物がいくつかある。キャンパスを歩いていると楽しい。見慣れたところなのに、ときにはっとする風景にであうことがある。いつだったか、ゲスト・ハウスから宗教センターの方をみたとき、クラーク館の塔と薨が実に新鮮に映った。黒く沈んだ薨は風雪に耐えて、「自然」そのものであった。私はこの風景を私の眼にしっかりと焼き付けておこうと思った。

玉井 敬之

（大学文学部教授大学）

菓子のかたち

林 淳 一

和菓子を見ると、「まあ、きれい。おいしそう。」と口に出してしまう。菓子の第一印象はかたちと色である。菓子を研究し始めてから既に十七年を経たが、この間を振り返ってみると、菓子のかたちに関心を持ってきているようである。もともと化学の教師として同志社に入ったので、菓子を研究するなどとは思ってもいなかったが、しかし、同志社に入ってみると、化学の授業だけではダメなこととすぐ分かってきた。会議などで顔を合わせる度に、四人の女教授から「家政学を勉強して下さいね。」と、言われ、言われして、

五、六年色々やっているうちに思いついたのが和菓子である。和菓子ならば、農学部の商品工学科の研究とも、また、家政学部の調理学の研究とも競合せず、独自の研究領域を持つことが出来るので、今から思えば、良い着想だったといえる。

しかし、実際に研究を始めるとなると、どこから手をつけて良いのか、まったく手がかりがなかった時に、高家謙次氏の指導を受けられたのは幸せであった。氏は菓子製造について優れた技術を持ち、特に有平糖については当時、わが国の和菓子業界の中で、トップ

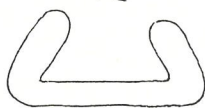
の技術を持った方である。

最初に取り組んだのは落雁である。落雁はみじん粉(米粉)と砂糖に、しとりを加えて成型し、乾燥するというだけの製造工程で、蒸すとか、焼くとかの加熱作業がないので、それだけ簡単だろうと考えて、取り組んだ落雁であるが、しかし、物事はそんなに甘いものではない。作業が簡単ということは、ゴマカシが利かなくて、製造技術の巧拙がモロに出てしまうということである。形がきちんと整っていて、しかも、口どけの良い落雁はプロの手にかかれば、無造作に出来上がるのだが、そこまですぐに大変な苦心である。口どけを良くすれば、形がきれいに仕上がらない。形をよくしようとすれば、歯が欠けるほど硬くなるというわけで、まともな落雁が出来るようになる迄には一年ほどかかったが、これが菓子の形にこだわるようになった最初である。

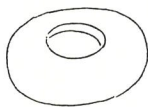
ところが、落雁を扱っていたの発見は、落雁は少なくとも数百年にわたる歴史をもっているということである。わが国で最初に落雁を作ったという伝承を持つところはあるが、落雁も、やはり饅頭、羊羹と同様に、中国か

ら輸入されたものであろう。中国の元の時代に編集された「居家必用事類全集」の中に落雁の原型と思われるものが出てくる。宋の王朝が減じて元の時代になった時、それまでの家政に関する知識が失われるのを憂いて、家政学ハンドブックとして編集されたのが、この書であるが、この書の「庚集十三回回食品」の項にある「哈耳尾」(ハルウエイ)の製法は、「乾いた麦粉をよく炒ってふるいを通し、蜜を加え、少し水を加えて形を作り、刀で切る。」とある。現在の落雁は米粉で作るのが多いが、麦粉を用いた麦落雁も現に作られており、この製法からいって「哈耳尾」は落雁の原型と考えられる。しかも、この「哈耳尾」は回回食品であるが、回回食品とは回教徒の食品のことであり、遠く西域の地から、シルクロードを経て中国に伝来したものである。中国に伝来し、さらに

二梅枝



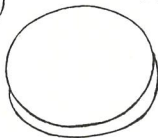
御厨子所預所製
赤サバ



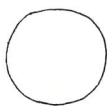
元日調進 饅子 ツギシ



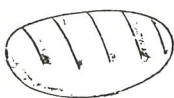
御厨子所預
同上所製
鐸鐸
エリウ



団喜 ダニキ



饅子
カッ
餠



わが国に伝来したのはもっと古い時代であろうが、「居家必用事類全集」の中に回回食品、女真食品等まで記載したのは、西域の地までの大帝国を作った元の時代であったからであろう。小さな菓子一つにも東西交流史のほのかな流れが投影していることを知ったのが、菓子の歴史を研究するきっかけであり、江戸時代百七十年分の京都御所からの注文控帳か

ら、この時代の菓子の流れをたどることもしている。

話を元にもどして、落雁は形を自由に成型することができるので、春は牡丹、秋は菊、稲穂に雀などと季節感を大切にして成型するが、江戸時代にはもっと大型の風景、人物等が、極彩色の落雁で作られた。十一代将軍家斉は特に落雁を好み、五十種ほどの御好み落雁の名が残っている。このように、ものの形を作って楽しむ菓子は世界にもそれほど多くはない。ドイツ菓子の Lebkuchen は小麦粉と蜂蜜を混ぜて焼き、彩色した美しい菓子であるが、着色した粉で図柄を表現する落雁の繊細さ、芸術性には及ばない。落雁の原型のある中国でも形の美しさはあまり求めないようである。日本人はものの形を作ることを特に好む民族のようで、この傾向は友禅染にも現れている。

しかし、ものの形を作った菓子は落雁が最初ではない。菓子はもとは果子であり、自然の木の実、草の実を菓子としていた日本人が始めて知った人工菓子は奈良・平安時代に中国から渡来した唐菓子(からかし、からくだもの)である。唐菓子は小麦粉、米粉、豆粉

などを練って油で揚げた菓子であるが、私達の祖先はそれだけでは満足せず、色々な形を作って楽しんだ。唐菓子八種は梅枝、桃枝、餠餠、桂心、黏臍、蟬饅、鮭子、團喜をいい、この中で桂心は肉桂の香をつけたものであるが、その他はそれぞれものの形を、すなわち、ウメの枝、モモの枝、餠饅(スクモムシ)、ヘそ、銅羅(餠入り)、芋の子、団子の形を作っている。唐菓子はこの他にもあり、粉熟(ふずく、ふんじゅく)は哈耳尾とはぼ同じ製法である。

鎌倉・室町の頃に伝来した羊羹など羹の類も、ものの形を作っている。この時代の羊羹は小豆餠に小麦粉などを加えてこねて蒸した蒸羊羹である。庭訓往来、尺素往来などには、禅宗寺院における点心の種類として、笋羊羹、猪羹、糟鶏羹、鼈羹、白魚羹の名が見える。これは禅宗の僧が猪や魚の羹を食べたと考えるよりは、羊羹でタケノコ、イノシシなどの形を作ったと考える方が自然である。

さらに、安土桃山時代に南蛮人によって有平糖が伝来した。有平糖は白砂糖から作られる飴で、自由にものの形を作ることが出来る。江戸期には大名に献上された有平糖の大鯛が

割れて、中に詰まっていた賄路の小判が露見した事件もあったようで、大型の有平細工の技術が完成していたことが分かる。

文化・文政期には和菓子の技術はほぼ完成し、餠に小麦粉などを加えて腰を強くして、細工した菓子の形がだれないようにして、さらに菓子は精巧になった。京都の和菓子屋にはいまでもそのしきたりを守っている店があるが、以前は菓子は注文生産で、客がくると菓子の見本帳(菓子図譜)を見せて注文を取ったものである。江戸中期以後の菓子図譜十七種二五冊に載っている菓子の図四五三三図の中で外形が角型の二〇〇九種についてみると、菊とか鶴など動物の形の入った図は四三九図で五分の一以上になり、その他に月、雲、山などの図柄も多いから、日本人が実在するものの形にいかにか執着しているかが分かる。もっと写実的な菓子として、菓子に関する行事についても出品される工芸菓子はまさに食べられる芸術である。

このような菓子の世界に関係して、いつしか菓子の形に関心をもつようになってきた。形といっても芸術性ではなくて、形そのものである。菓子全体の形、表面の様子、割れ口

は菓子のかたさ、口あたり、口どけというような菓子のおいしさについて情報を与えてくれる。十倍から五十倍の顕微鏡で見れば、もっと詳しい情報が得られる。ここで数百倍以上、あるいは一万倍というような大きな倍率を考えてはいけない。私たちの舌で、あるいは手で区別できるのは〇・一からせいぜい〇・〇五mm程度であり、もっと大きな倍率が必要になるのはわたしたちの感覚から切り離された世界である。落雁や、クッキーを割ったときの割れ口の形から、材料の一樣さ、かかった力の一樣さ、静かに力をかけたのか、急に力をかけたのかに分かり、口の中の砕け方が予想できる。パイも切ったときの断面の形から出来ばえが分かり、おいしさが予測できるが、饅頭や羊羹となると断面からおいしさは予想できない。パイは中に隙間があり、多孔質といわれるが、この多孔質の構造がおいしさに関係しているのである。クッキーも落雁も多孔質であるが、羊羹は中に隙間はなく、羊羹など非多孔質のもののおいしさは別の考えが必要である。

饅頭は皮の部分は多孔質で、皮だけを蒸したときの膨張の過程を連続撮影したこともあ

る。クッキーを焼くと生地の中に気泡ができ、多孔質となる。クッキー生地の中の気泡の状態を、生焼けの状態から、十分焼き上がった状態までそれぞれ断面を見ていくと、まず表面に平行に細長い気泡が現れ、次第に気泡の厚みが増し、さらに焙焼が進むと、細長い気泡は縦方向につながって長い気泡となり、これが膨張して大きな気泡となる。落雁の多孔質構造はクッキーとは成因がまったく異なり、米の粉と砂糖の粒子が圧縮されて、残った隙間によるものである。これを三十五倍の電子顕微鏡で見ると、米の粉と砂糖粒子の間に橋がかかっている。落雁を作るときに、砂糖蜜（しとり）を少し加えて揉む作業があるが、この作業の間に粒子同士に液体の砂糖蜜で橋がかかり、これがそのままの形で乾燥して落雁が出来ることが分かる。砂糖蜜による橋のかかり方が落雁の品質を決めるものであり、菓子職人の修行の一つは、必要にして十分な橋をかけることにあるといえる。

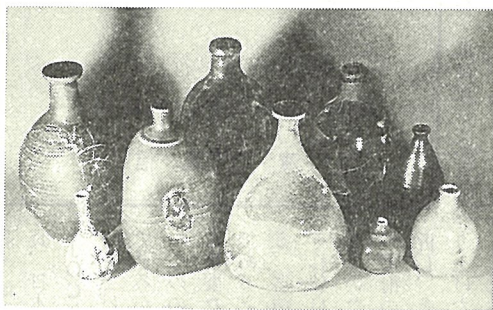
日本人は物のかたちにこだわる民族であるが、物のかたちも追求していくと、また新しい学問の世界が開けるものである。

（女子大学教授）

同志社校地出土の埋蔵文化財(4)

「多様な徳利類」

鈴木 重治



（安土・桃山～江戸時代）
（左下の古伊万里高さ 13.5 cm）

公家屋敷や寺院の境内であった今出川キャンパスからは、多量の徳利が出土している。多種多様な徳利を観察していると、生産地による形態の差以上に、時代による製作技法の差や伝統的な技法の継承が生産地によって違うことがわかる。

ここに示した信楽（前列右端）、丹波（後列右三個）、備前（前列中央三個）などの中世六古窯系の資料と、肥前の古伊万里（前列左手前）、唐津の徳利をみても、時代差、技法の違いなどが形態上の特徴とともに指摘される。

中央手前の備前の船徳利の形態は、中世以来の伝統的なものであるが、口縁部の立ち上りを盤状に造り出していることは、良く時代の特徴を示していて、左隣りの布袋徳利の貼り付装飾とともに備前焼の新取性をうかがわせている。

信楽焼にみるきめのこまかい胎土に長石粒を含むものと、丹波焼の露胎部（釉のからない部分）でみる胎土の差も大きい。信楽の土が古琵琶湖の湖底堆積物を主体としているのに対して、丹波の土が田土と山土の割合によっているからである。

唐津の鉄釉にも、赤味のあるはだとともに個性が見出せる。古伊万里の磁質のはだは、単にその白さのみで魅せられることはない。

（大学校地学術調査委員会調査主任）